

6	3件 (5名)	2件 (4名)
7	5件 (8名)	4件 (5名)
8	4件 (12名)	3件 (10名)
計画 9	5件 (5名)	5件 (5名)
10	2件 (5名)	2件 (5名)
11	4件 (4名)	4件 (4名)
12	6件 (10名)	6件 (10名)
13	2件 (3名)	2件 (3名)
自 由	29件 (54名)	26件 (50名)
資 料	12件 (32名)	12件 (32名)

(3) 研究会

昭和63年度は、「研究会」と小規模の「ミニ研究会」が以下のとおり採択・実施された。

A. 研究会

1. 第18回ホミニゼーション研究会
2. 霊長類の生体防御機構と感染症
3. 霊長類の生殖をめぐる
4. 運動器の系統発生
5. 霊長類の脈管系の機能と形態
6. 心理学と隣接領域の対話
7. ニホンザルの第四紀の古生態と古地理について

B. ミニ研究会

1. 利き手の進化と脳
2. 行動と集団の種内変異

2. 研究成果

A. 計画研究

課 題 1

飛騨山系槍ヶ岳周辺に棲息するニホンザルの高山帯への適応についての生態学的研究

泉山茂之 (マカク研究会)

1988年度は、3月から5月までの積雪期に39日、6月から11月までの無雪期に50日の調査を実施した。環境庁から鳥獣捕獲許可を得て、高瀬川源流部の名無沢、ワサビ沢で4月9日、5月7日にそれぞれ8才、6才と推定されるオトナメスを捕獲、146.25MHz、146.11MHzのテレメーターを装着した。群れはYN群、EW群と別群で、個体数は21頭、42頭であった。これらの装着個体をテレメーターの電池寿命の尽きた9月下旬まで追跡するこ

とにより以下のことがわかった。

1) 積雪期3～5月上旬のYN群の遊動域は2.5 km² (高度1,350～1,650m)、無雪期7月は4.5 km² (2,000～2,860m)、8月は5.0 km² (2,200～3,050m)、9月は10.5 km² (2,300～3,100m) で、7、8月に比べ、9月の利用地域は約2倍、1日あたりの移動距離は約3倍であった。10月上旬にも高所(2,600m)で群れの棲息は確認したが、すでに電池寿命は尽き群れの特定、追跡はできなかった。

2) 無雪期と積雪期の利用地域は直線にして約5 km離れており、無雪期の遊動の安定する7月中旬～10月上旬の間、YN群は積雪期の利用地域へ下降することはなく、完全に垂直的に使い分けられている。

3) 無雪期YN群の利用地域は槍ヶ岳を中心とした地域で、その西端は赤岩岳からやや大天井岳(2,922m)寄りの稜線であった。またEW群は約6 km先の燕岳(2,763m)以北を利用していた。この間にテレメーターが装着されていない群れが2群確認され、槍ヶ岳寄りに出現する群れは積雪期に梓川で過している群れ、もう一方は牛房川の群れと推定された。

4) 9月8日に32頭+αのカウントをしたYN群がテレメーター装着の翌日(4月10日)のフルカウントでは21頭しか確認できず、同日1.5 km上流で10数頭と考えられるグループを確認しており、この両グループが合流して無雪期に槍ヶ岳周辺を利用していると考えられた。このようなグループは高瀬川源流部で多数観察しており、今後各グループにテレメーター装着を実施し、それぞれのグループがどのように合流し、無雪期にどこに出現するかを明らかにしてゆきたい。

冷温帯域におけるオスの移動分散様式

小金沢正昭 (栃木県立博物館)

東 英生 (野生動物保護管理事務所)

ニホンザルの地域個体群において、成獣オスの分散は、その動態を知るうえで極めて重要な課題である。本研究は、栃木県の日光足尾地域に分布するニホンザルを対象に、未成熟個体へのイレズミと成獣個体へのテレメトリー法の適用とによって、継続的にオスの移動分散を解明しようとするものである。本年度は、隣接する3群(A、B、C群)の成獣メス各1頭(計3頭)を捕獲し、テ